

第2回 三次市立学びの多様化学校等の設置に係る検討会議 議事録

件名	第2回 三次市立学びの多様化学校等の設置に係る検討会議		
日時	令和8年3月11日(水) 10:00~12:00	場所	三次市役所本館6階601・602会議室
出席者	13名	出席者(事務局)	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・七木田座長</li> <li>・山崎委員</li> <li>・小根森委員</li> <li>・赤木委員</li> <li>・沖山委員</li> <li>・渡邊委員</li> <li>・部谷委員</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・田中副座長</li> <li>・今村委員</li> <li>・水戸委員</li> <li>・池田委員</li> <li>・石田委員</li> <li>・宍戸委員</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・迫田教育長</li> <li>・宮脇教育部長</li> <li>・豊田教育部次長</li> <li>・渡部教育企画課長</li> <li>・新谷学校教育課長</li> <li>・高野教育企画係長</li> <li>・平主事</li> <li>・曲田専門員</li> <li>・山崎不登校支援政策コーディネーター</li> </ul>
	オブザーバー 1名 ・地域関係者 君田自治区連合会 宮本会長		
議事	(1) 三次市立学びの多様化学校について (2) 今後のスケジュールについて		

事務局 定刻となったため、第2回三次市立学びの多様化学校等の設置に係る検討会議を開会する。  
 本日は傍聴の希望があるため、入室を許可する。

～傍聴者入室～

第1回検討会議にはご都合により欠席されたが、本日出席いただいている委員を紹介する。

～委員の紹介～

また、本日は学びの多様化学校設置予定場所の地域関係者として、君田自治区連合会の宮本会長にお越しいただいている。  
 宮本会長には後ほど、三次市の資源を生かした体験・探究について、君田地域での活動を紹介していただく。

続いて、第2回検討会議の開会にあたり、七木田座長より一言ご挨拶をいただく。

七木田座長 前回は、めざす学校像やめざす生徒像、学校の特色について多様な意見をいただき感謝申し上げます。本日は配布資料にある、学びの多様化学校の設置に向けた論点について委員の皆様から意見をいただきたい。どうぞよろしくお

願います。

事務局 ここからは七木田座長に進行をお願いする。

七木田座長 続いて、次第「3 報告」に入る。事務局から説明をお願いする。

事務局 ～資料に沿って説明～

七木田座長 ただいまの説明に対して、ご意見やご質問があればお願いします。

委員一同 ～質疑なし～

七木田座長 続いて、次第「4 議事（1）三次市立学びの多様化学校について」に入る。  
はじめに、冒頭紹介のあった君田自治区連合会の宮本会長から現在の君田地域の状況について情報提供をしていただく。

宮本会長 君田地域で行っている活動内容を報告する。  
3年前から学校運営協議会の関係で、小中学校で検討委員会、あるいは実行委員会を月に2、3回程度行っている。  
学びの多様化学校の受入体制について教育委員会から説明があり、地域でも住民に広く周知するために地域住民への説明や理事会での説明を行い、委員会も設置して進めている。  
ふるさとまつり等のお祭り、各種連絡協議会があるが、これらも子ども中心になるよう考えている。また、君田中学校が閉校するというので、昨年からは君田小学校と君田中学校の合同運動会や住民を含めた総合運動会を行っている。今年も5月に実施する予定である。  
君田地域も人口減少がかなり進んでおり、人口増進に向けた対策を進めている。定住対策や空き家対策、市営住宅の点検、入居促進等を行っている。他の地域で、学びの多様化学校に通うために保護者と一緒に移住していると聞いた。庄原市や三次市でも最近移住された方がいると聞いたため、まちづくり交通課とも連携していきたい。  
子どもが少なくなっても、地域を挙げて一緒に地域づくりをしていきたい。

七木田座長 学びの多様化学校の開校に対して、地域の方々はどのように受け止めているのか。

宮本会長 住民には受入体制や対策について話をしている。

七木田座長 先ほどの宮本会長の説明を踏まえながら、資料3の論点ごとに意見をいただく。はじめに、資料3の論点1「安全安心な居場所・体制について」事務局

から説明を求める。

事務局 ～資料3、別紙1に沿って説明～

七木田座長 事務局からの説明を踏まえ、ご意見ご質問をお願いします。

今村委員 1 つ目に、一度学校から離れてしまった子どもたちが中心となるため、学校らしさを感じさせる雰囲気はできるだけ避けることが大切だと思う。「学校っぽくない名前をつける」「教室ではなく“ルーム”と呼ぶ」「カフェテリアのような感じにする」等、楽しい空間をつくり、従来の学校のイメージから距離を置く工夫がよいのではないか。

2 つ目に、30 人の学校としては校舎が広いのではないか。学校に通う子どもたちの多様な特性を勘案し、リスクに最大限配慮する必要がある。はじめは3階を使わないことや、窓が全て開かないようにする等の工夫が必要ではないか。個別の空間をつくりつつ、目の届く状況にする必要がある。危ないものを置かないことも重要だと思う。希死念慮が出てきたときに高いところから飛び降りてしまう可能性もあるため、窓が少ししか開かないようにすることも重要ではないか。しかし、風通しのよさは大切だと思うので、工夫が必要だと思う。

3 つ目に、家庭での生活習慣が長い子どもが来るため、人に対する不信感がある場合もある。鍵付きのロッカーを置き、なくしたくないものを入れる場所をつくることで、紛失した際に自分がロッカーに入れなかったことが原因だとフィードバックができる。人との関係構築がうまくいかず衝突が起きることも前提にしなければならない。物を自分で管理することも必要であるし、衝突があった時に落ちつける空間をつくることも重要だと思う。

渡邊委員 スクールSでも窓が半分程度しか開かないつくりになっている。

通学について、子どもたちは色々な方法で登校すると思う。家は出たが登校はしていないというケースは一番避けなければならない。スクールSでは登校時にQRコードを使って保護者が登校確認できるシステムを取り入れている。様々な通学方法があることを考えると、リスクという面もQRコードでの登校確認は一つの方法ではないか。ただ、表裏一体で、自分が管理されていると感じて嫌う生徒がいる可能性もあるため、そこは保護者と相談しながら進めることが必要だと思う。

赤木委員 学校らしさを無くすことは大切だと思う。個人の勉強机と椅子も同じだと思う。この写真に写っているものは学校を想起してしまうと思う。木の天板も同じではないか。窓について、小学校でも体が出ないように少しだけ開く窓にしたり、ストッパーを付ける工夫をしている。同じようにするとよいのではないか。

- 七木田座長 勉強する際は机が必要だが、具体的にどのような机と椅子がよいか。
- 赤木委員 どんな机でもよいと思うが、例えば天板の色が様々であったり、形も円にできる机等があればよいのではないか。
- 山崎委員 子どもが選べることが大事ではないか。学校を想起させるようなものは嫌いな子どもがいる一方で、学校の机はそんなに嫌いではない子どももいるのではないか。私たちが想定したものに全て合わせることでよいとは言えない。どちらもあるとよいのではないか。その日の気分で自分が集中できる場所で何をするかを決められるとよいと思う。  
リスクを想起していくと、どうしても管理が必要になると思う。教職員の備えておくべき資質につながってくると思うが、物的な環境を整えればよいわけではなく、物的な面に配慮しつつ、教職員がどんな資質を備えていけばよいか考えなければならない。
- 沖山委員 学校を想起させない前提で話が出ていた。私も今まで色々なタイプの不登校の子どもや、問題を抱えて学校に来ることができない子どもに関わってきた。中には刃物を出したり、飛び降りようとして、それを引きずりおろしたこともあったが、そのような子どもも落ち着けば学びに向かいたいと思っていたように思う。やはり学校は学ぶ場所であることが一番大事ではないか。学ぼうと思っている子どもには学びに適した空間をつくれたほうがよい。学びに向かっておらず、心の内側の問題に向かっている子どもには、問題を解決するにふさわしい場所をつくれたほうがよいと思う。  
今まで勤務してきた学校の中には、とても広くて綺麗な学校もあった。その広い場所を自由に使ってよいし、会話の場所にしてよいという柔軟な空間であった。その中で問題になったのは死角になる場所が非常に多く、教室以外の場所での生徒同士のトラブルである。隠れられる場所が多いため、教職員が探し回ることもあった。君田中学校を使って新しい学校をつくる際、空間を使える学びの場になるかと思うが、その空間のありようを考えなければならないのではないか。
- 七木田座長 デッドスペースをできるだけ少なくすることは、教室を閉じるということにならないのか。
- 沖山委員 授業の中で多目的室を使ってもよいと伝えた時は把握ができるかもしれないが、各部屋へ自由に分かれた状態での授業では把握できないのではないかという意味で、教室を閉じるということではない。
- 水戸委員 3月まで君田中学校でスクールカウンセラーをしていたのでよく知っている

が、30人には校舎が広すぎると思う。2階だけで十分ではないか。見晴らしも非常によく、2階からでもよい景色である。多目的ホールは写真以上に広く、ピアノがあって休憩時間には生徒が弾いており、とてもよい雰囲気である。

フリースクールに行くと、勉強したい子と勉強はしたいが小さい子どもとも関わりたい子どもの両方がおり、スペースを完全に別で分けていた。学校らしい雰囲気で集中して勉強したい子どもと、勉強はしたくないが自分の好きなことを邪魔されずにしたい子ども、机をくっつけて楽しそうな雰囲気で勉強しつつ、小学生が遊んでいるのを眺めたり、時々関わったりする子どもと分かれている。小学生が勉強をしたい子の邪魔をした時は、教職員が入って邪魔しないよう気をつけさせている。このように、勉強したい子、1人で静かにしたい子と、みんなと関わりたい子がそれぞれ選べる空間になるのがよいと思う。それと同時に自殺のリスクがある子どももいるため、見えない空間をどのようにするかも大事なことだと思う。この2階のスペースを中心に、管理しつつ、子どもが自由に選べる空間が大切ではないか。

山崎委員 死角をつくらないように物理的に閉じてしまう方法もあるが、人の目を増やす方法もあるのではないか。地域のボランティアが内部にたくさん入っている学校は荒れていても落ち着くのが早いと感じる。広島市内や大阪市内でも地域の方が学校に入ってくれていただくことで子どもの様子が落ち着くと聞く。地域の理解が得られるのであれば、学校の中に入って斜めの関係をつないでいくことが大事ではないか。

宮本会長 君田中学校は空間が広く明るい。三次中学校や十日市中学校に比べて廊下も倍ぐらいあり、ワックスがけもしており、37年経っているがうまく維持されている。見晴らしのよい教室のため、物を除けば目が行き届くと思う。コミュニティ・スクールの活動で、ゲストティーチャーとして月に何回か学校に関わっており授業等を見ているが、非常に落ち着いて勉強できる空間、あるいは地域だと思う。

七木田座長 その他なければ、資料3の論点2「生徒基点の学びについて」事務局から説明を求める。

事務局 ～資料3、別紙2-1、2-2に沿って説明～

七木田座長 事務局からの説明を踏まえ、ご意見ご質問をお願いします。

池田委員 不登校の生徒の中にはかなり専門的な知識や技能を持っている子が多い。創造は音楽・美術・技術・家庭科の部分になるが、それを追求する選択ができるのか伺う。教職員ではついていけないレベルの子どもが多くいる。

子どもは自分にはなにもないと感じているが、自分にはこれがあるんだというものを必ず持って卒業してほしい。

事務局 現在選択できる方向で考えているが、選択内容をより深く検討する。

宍戸委員 満身創痍の子どもを救うためのセーフティネットとしての学校だが、このセーフティネットの穴から漏れ落ちる子どもがおり、学校までどうやって通うか話し合う必要がある。庄原市や安芸高田市の子どもたちと関わる中で様子を見ると、このような状況に対応できる子どもは少ないと思う。理由を聞くと送迎が難しいと言われる。そのため、私たちが送迎を行うことがある。保護者が仕事の都合で送迎できない場合があることや子どもも送迎しないと来ないためである。まずは学校に来ないと始まらないため、送迎が必要ではないか。来ることで初めて指導者と子どもの信頼関係ができ、特性が分かり、この子にはこのやり方がふさわしいと進み始める。三次市が今回この学校をつくる上で、公共交通機関ありきで話が進んでいるが、地域の方が送迎することはあり得るのか。地域が協力するという話があったがどうなのか。そのような形の協力はできないか。

七木田座長 どのくらい的人数が公共交通機関を使うか把握しているのか、また送迎の可能性は考えているのか、事務局から説明を求める。

事務局 今は皆様から広くご意見をいただくことをお願いしたいと考えている。公共交通機関を挙げたのは、1つの選択肢である。広い地域なので、時刻のことも考えなければならない。学校へ来るためにはどうすればよいか意見を伺いたいものであって、この想定を結論として進めるものではない。送迎については、設置者の責任としてどこまでできるのか、ご意見をいただき考えていく。

今村委員 三次市の小中学校の始業時間が8時15分頃である中、9時半始業に設定していることは子どもにとってとても楽になると思う。ただバスの時間が8時26分発しかないため、それ使うと8時26分までに登校しなければならないものと同じである。9時半に合わせた路線バスが準備できれば、選択肢が増えるのではないか。8時26分に間に合わない場合、次は11時40分まで待つ必要がある。学校に行く気持ちになったが起きることができなかった子どもを救えなくなりそうで気になった。

地域住民の方の送迎は実現できれば素晴らしいが、以前に雲南市教育支援センターのスタッフが公用車での送迎の際に事故が起きたことがあった。子どもやスタッフにも影響があるため、本来の方法で登校する上で、ボランティアの仕組みを考える方がよいのではないか。起きて学校に来れる子どもが対象になるのではないかと思うが、せめて出発の選択肢の方法を増やせるとよ

いのではないか。雲南市もバスの便数を増やしていただいている。

七木田座長 せっかくゆとりのある時程になっているのに、通学にハードルがあるともったいない。朝起きることが苦手な子どもを学校へ向かわせるために、アドバイスや示唆があればご意見をお願いします。

小根森委員 私の分野だと、子どもにも飲ませられる薬等で調整するようになる。現状を見ると、朝起きられず遅れて行くといっても、バスだとなかなか難しいと感じる。

沖山委員 私が担当している SSR に来ている生徒の中にも、保護者が仕事に行く時に起きよう声をかけるが寝てしまったり、自力で来るにも自転車で通うには距離があるためバスを選択するが、バスの時間がなければその日は来ることができない生徒がいる。登校さえすればきちんと学習に取り組み、様々なことに参加できる生徒である。この生徒に対しては朝決まった時間に私が起こしに行っている。事故の可能性を考え、目覚めても自分の車には乗せず、起きたことを確認したら自転車やバスで来るよう声をかけて学校に帰るようにしている。学校に行きたいが朝が苦手な起きることができない子どもが多いのではないか。朝登校していない時に、生徒の所在確認の方法を考えなければならない。私は SSR の担当のためすぐに動ける立場だが、通常の教職員が生徒の家に起こしに行くことは現実的に難しいと思う。そういったことが可能になればよいのではないか。

ゆとりある時程の項目だが、新しい学校では部活動というものは最初から無い想定で生活するのか。

また、「CORE」や「創造」、「結タイム」という新しいカリキュラムについて、「結タイム」は 10 分間のコミュニケーションタイムとされており、そのような時間をとることは素晴らしいと思う。この 3 つの教科の評価基準はどのように考えているのか。県立高校の入試に関していえば、どのような評価でどのような形で頑張りを高校に伝えるのか。

七木田座長 教職員がある程度自由に動けるような体制を想定しているか、部活動はどのようなになるか、評価方法についての 3 点について事務局の考えを伺う。

事務局 部活動について、令和 9 年度から休日と土日は地域展開ということで地域の方にゆだねていこうと考えている。平日はゆとりのある教育課程の中で、子どもの実態等、皆さんの意見を鑑みながら考えていく。

評価について、生徒の学びについての評価事項があるが、数値として出すか、文字として出すか、今後ご意見を鑑みながら考えていく。進路にかかわる重要なことであり慎重に検討する。

人事については、子どもの安全安心のためにしっかり協議する必要がある。

人を増やせるのであれば増やすことも必要だと考えている。

山崎委員 時程にゆとりがあるのはよいことだが、年間授業時数が決まっている中で、その日の授業の順番は子どもが選べるという理解でよいか。

事務局 子どもがそれぞれ時程の内容を選ぶことができ、個別ですか集団ですか選択できるようにすることが必要だと考えている。

山崎委員 小学校のスクールカウンセラーとして関わる中で、給食のつまずきで登校が難しくなる子どもが多くいる。給食を少ししか食べられず、周りの目が気になり、給食そのものがストレスになる場合や、発達特性により、給食がネックになっている。お弁当の方がよいのではないか。

水戸委員 偏食の子どももいるため弁当はよいと思うが、君田中学校に通うのに朝弁当をつくるのがしんどいという声もある。選択できるようにしてはどうか。

今村委員 料理の上手な子どもが多いため、家庭科としてご飯を作る時間があれば、色々なものを作るチャレンジになるのではないか。

七木田座長 その他なければ、資料3の論点3「本市の資源を生かした体験・探究」について事務局から説明を求める。

事務局 ～資料3、別紙3-1、3-2に沿って説明～

七木田座長 合わせて資料3の論点4「どこでも学べる環境」について事務局から説明を求める。

事務局 ～資料3に沿って説明～

七木田座長 事務局からの説明を踏まえ、ご意見ご質問をお願いします。

宍戸委員 マップを見ると、学区外でいろいろな活動をされているんだなと思った。ある一定の子どもには有効でのびのび育つと思うが、多様な人と関わるのが苦手な子どもや、自閉傾向が強い子ども、特性を持っている子ども等はなかなか外に出たくないケースがあるのではないか。学校の柱として挙げられているが、学校外での学習についていけない子どもを想定しているのか。

事務局 この議論の前提として多様な子どもたちがおり、様々な想定が必要だと考えている。学びにすぐに向き合えない、あるいは意識がいかない子どもも含めて考えていく必要がある。やり方について、ご意見があれば聞かせていただ

き運営の中で工夫をしていく。

赤木委員 学校だけでなく、三次市の様々な施設や地域に出て、そこで学びを深めていく取組はとてもよいことであり大切だと思う。「個別最適な学び」といっても一人ひとりがそれぞれ学ばばよいというわけではない。友達と一緒に学びたい子どもや方法を自分で選びたい子ども、一人でじっくり探究したい子等、子どもによって望む学び方は様々である。だからこそ、その違いにどう対応していくかが大切だと思う。

「今日は鶉飼について学びたいから、実際に鶉飼の現場に行きたい」と子どもが言ったとき、そこに行くための手段等、現実的な問題が出てくる。小学校でも様々な学びの機会をつくりたいと思っても、実際にどうやって現地へ行くか考えることが難しい。その点について、どのように考えているのか。

事務局 アクセスについても対応する必要がある。そのやり方をしっかりと保障できる予算取りも必要だと思っている。地域の方との交流等もできると思うので、教育課程を考える上で仕組みづくりも考えていきたい。事例があれば教えていただきたい。

宮本会長 地元が心配しているのが、果たして何人来るのかということ。1学年が10人で3学年では30人と聞いているが、違う場合も想定すべきである。君田小中学校とは総合学習の中で地域体験として、業者や商店、君田温泉等、地域との交流を年2回程度行っている。他には月に1回、高学年と先生が5・6時間目に神楽体験として練習に来て指導していた。地域の神楽では週に1回夜に練習の場を設けている。地域や保護者の受け入れ態勢は非常によいと思う。今後も引き続き支援を行いたいと考えている。市に要望したが、子どもと保護者が宿泊し地域体験ができるよう、学校を利用した宿泊施設があればどうか。または、保護者が子どもと一緒に登校し、授業の間は保護者が待ち時間を過ごせるような場所や親子で昼食がとれる施設やカフェができないか理事会で話が出た。受け入れを想定しながら、我々も協議をしている。進行状況を見ながら、しっかり対策を練ることが受け入れ側や教育委員会の仕事ではないか。

石田委員 君田ならではの体験やイベントがあり、楽しそうだなと思った。参加に抵抗がある子どもがいるなら、実際に参加する人とそれを画面で見て楽しむ人がいてもよいのではないかと。画面で見る人は絶対に見る必要はなく、少し見ることを繰り返すうちに、面白そうだから行ってみる、現場で見ると、少しずつ近づいてくる。そのようなきっかけになればよいのではないかと。

今村委員 「みよしまるごとキャンパス」という考え方で、様々なことに取り組むことは素晴らしいが、学校が始まったばかりの中で、やることリストだけが積み

上がると、調整でスタッフが手一杯になるのではないか。本当に大切なのは生徒一人ひとりであるのに、スタッフの力点がイベント運営に変わってしまう。あれこれとやるよりも、まず生徒にとって何が必要かを考えて進めていくべきである。

最初からやることを決めて進めるよりも、実際に動き始める中で、「次はこういこうことをしてみたい」というアイデアが自然に湧いてきたタイミングでサポートしていく方が、本来の流れとしてはよいのではないか。三次市全体で「みよしまるごとキャンパス」という考え方が適用されること自体は素晴らしいと思う。

山崎委員

市の資源を活かした体験は素晴らしいと思う。他市の取組として、総社市のひきこもり支援の事例が参考になると思う。総社市では「ひきこもり支援サポーター」を市民から募集しており、市が養成講座を実施している。その講座を受けた方は、「自分はこういうことが得意です」「こういう形でサポートできます」といった内容を登録する仕組みになっている。その登録内容を見て「会ってみようかな」と感じ、外の世界との関わりを取り戻すための足場になる。例えば「この人と一緒に出かけてみよう」「次はこの人と話してみよう」といった小さな一歩を重ねながら、社会参加や社会復帰につなげていくという仕組みになっている。

体験的な学びの場を用意すれば、子どもたちが自発的に関わってくれるのが理想だが必ずしもそうではない。だからこそ、その関わりを促す仕組みづくりがとても重要である。地域の方々の協力が得られるのであれば、不登校の子どもたちへの理解やどのように伴走すればよいのか、先生方と地域の方が一定の理解を共有しながら、子どもたちの学びを一緒に支えていける仕組みがあるとよいと思う。

田中副座長

三次市の教育支援ルームでは、年間を通じて月1回程度の体験活動を組み、外部の方に来ていただいたり、出かけてたりという活動をしている。もちろん、体験活動に行きたくない子どもや教育支援ルームで勉強する子どももいる。そのような中での体験活動は、体験に出会うというより、人に出会うものだということを実感している。去年来られた講師からの「あなた新顔ね」「去年もおったよね」「じゃあ頼むよ」という声掛けが、子どもにとっては嬉しいものになっている。その講師の方を信頼でき、そのような人と出会えることが体験活動だと感じている。地域とつながる場があり、ゲストティーチャーが気軽に参加でき、子どもたちも自由に出入りできる環境の中で、子どもが探究を始めたときに相談できる相手がいることが大切だと思う。資料3の(1)にもつながるが、いきなり大がかりな準備をするのではなく、子どもたち自身が「この人に聞いてみたい」と思える人材を見つけられるよう、地域の方のプロフィールを掲示すれば、自然に相談先を選ぶことができるのではないか。そのように子どもと地域のゲストティーチャーで一つずつ積み上げ

ていくのがよいのではないか。最初から先生が地域教材を選び、子どもに示すのではなく、創り上げていくことを大事にすればよいのではないか。

七木田座長 どこでも学べる環境として、AIドリルやデジタル機器の活用があり、三次市では1人1台タブレットを持っている。先日、別件でスウェーデンに調査をした際、スウェーデンでは国としてデジタルテキスト等を学校で廃止すると聞いた。そして、それについて保護者が賛成していると聞いた。なぜ保護者が賛成したかという、家でiPad等を使って勉強をしていると言いながらゲームをする子どもが増えており、せめて学校ではデジタル機器を触らないようにしてほしいと保護者は思っている。鉛筆を持って字を書くことさえしない子どもが増え、学校現場よりも保護者の方が危惧しているためだと聞いた。学びの多様化学校についての提案に結びつくかどうかは分からないが、デジタルツールを過信して推し進めることには少し注意が必要だと感じている。せっかくこうした人が集まる場をつくり、実際に人が集まってきているのに、そのよさが薄れてしまう可能性があるのではないか。だからこそ、デジタルに偏りすぎず、多様性を踏まえてバランスよく活用していくことが大切だと考える。

部谷委員 子どもが行きたいと意見を言えることは大事だと思う。人は意義を感じる方向に成長していく。子どもによっては、人との関係性の中で学校に意義を感じる子どももいれば、そこではなく自分の好きなことに意義を感じる子どももいると思う。意義が感じられて、心をゆらすことができる環境があるとよいし、期待している。自分の好きを豊かにでき、好きではないことであっても三次市の資源と文化は心をゆらす。その日子どもたちがどのように意義を感じたのか、子どもの姿から次の日の教育の環境につながると思う。教職員やチームのスタッフの方々がしっかり話し合える時間をとり、次の日の環境につなげてほしい。学校の中や地域で、子どもの姿を基点に構成されていくのだろうと思った。子どもが明日も行きたいと心から思える学校になってほしい。

水戸委員 先日、不登校の高校生から話を聞いたが、オンライン授業を受けても自分の存在が相手に伝わっているか分からないから続かないと話していた。SSRでもオンライン授業は不評である。学びの多様化学校では、オンライン授業を受けていると把握していることを生徒にきちんと伝え、生徒とつながる必要がある。そうでないとオンライン授業は続かないのではないか。

沖山委員 SSRでオンライン授業を受ける際、授業で全員に配布されているプリントがSSRの生徒の手元にないことがある。その時は私が教室まで行き、教科担任からプリントを受け取り、子どもに渡している。しかし、自宅でオンライン授業を受ける時はプリントを持っていくことはできない。前もって授業内容

に応じたものを準備すればよいと言われるかもしれないが、教科担任が日々の中で前もって準備することは非常に厳しい。オンライン授業はタブレットで AI ドリルをすることではなく、学びたいがわからないという子のための最後の砦であると実感している。

不登校の子どもの中でも、学びたい気持ちや自分を変えたい気持ちがある子どもが申請し、入学すると思う。色々な特性や事情を抱えた子どもが集まる中で、よいこともあるだろうがトラブルも多々あると思う。新しい学校では生徒指導規程はどのようにされる予定なのか。

事務局 資料 2 の 4 ページにあるが、校則や制服、体操服やかばん等は特に指定を考えていない。誰もが安全に学校生活を送れることを前提としたものの、定義については生徒と教職員が適宜一緒に考えていくように想定している。

沖山委員 中学校生活の視点になるが、例えば入学式や卒業式でその場にふさわしくない華やかな服装で登校したり、友達同士のトラブル対処方法や保護者への対処方法等、一定の想定と対応方法を示したものが必要ではないか。具体的にはどうなるのか。

七木田座長 本日の議論は本市の資源を生かした体験探究の内容であり、時間が限られているため、先ほどの質問については次回の枠とさせていただく。

その他なければ、議事「(2) 今後のスケジュールについて」事務局から説明を求める。

事務局 ～資料 4 に沿って説明～

七木田座長 事務局からの説明を踏まえ、ご意見ご質問をお願いします。

宍戸委員 今後、保護者支援の目線からの論点はあるのか。保護者の気持ちを支え、前向きな姿勢にすることで子どもが変わった人を見てきた。今後の論点に、保護者対応についても入れてもらいたい。

七木田座長 提案は事務局で整理をお願いします。  
その他なければ、本日子定していた議事はすべて終了した。  
議事の円滑な進行にご協力いただき感謝申し上げます。  
進行を事務局にお返しする。

事務局 熱心な議論に感謝申し上げます。  
以上をもって、第 2 回三次市立学びの多様化学校等の設置に係る検討会議を終了する。